

別紙

研究成果普及計画書

究機関名称：佐賀大学農学部

代表研究者氏名：武田 淳

研究課題 香辛料の生産と消費に関する地域資源学的研究：スリランカ、バングラデシュとインド三国間における社会・文化的背景の比較分析

助成年度 平成 15 年度

1 研究課題・内容の主旨。

自ら飲食する食文化に香辛料を組み込むようになったことは、人類が営々と築いてきた食文化の中でもきわ立った英知に属する。その種類の多さもさることながら、単に食欲をそそるためだけでなく、滋養強壮等を目的にしたものまで、多彩にわたる用途の幅広さは注目に値し、食文化の核的存在だともいえる。

特に熱帯地域に香辛料が多いことは周知の事実であるが、代表者の武田がこれまで行ってきた現地調査で構築した地域住民とのラポールをバネにスリランカ、バングラデシュとインドの三国に焦点をあてて、さまざまな香辛料が生産・消費される現場において、その社会・歴史・文化的背景（コンテキスト）を視野に入れながら学際的な比較調査を通して、香辛料がもつ地域資源学的かつ文化誌的な意義を明らかにする。

2 研究成果のアピール・ポイント。

香辛料が多量に、かつ多種にわたって生産され、また消費されるインド、スリランカとバングラデシュに焦点をあてた調査研究であること。香辛料の本場とも言えるこうした国々で日常的に消費する現場で現地の方々のラポール（一致）を得たうえでその社会・歴史・文化的背景をも視座に取り込んだ実証研究であること。

3 研究成果に対する進捗ならびにその発展性。

現地で調査研究に協力してくれた方々に謝礼の意を表するためと地域住民に調査研究の成果を還元するために、外国で行った調査研究は英文による報告書の作成は、たんに人類学者に限らず、研究者一般に課せられた共通で、かつ最低限の責務である。そのために報告が大変遅れてしまったことは否めない事実で、財団に迷惑をかけたことに深くお詫びしたい。なお成果の一部は、A

たことは否めない事実で、財団に迷惑をかけたことに深くお詫びしたい。なお成果の一部は、A Comparative Study on Usages and Consumptions of Spices among Sri Lanka, India and Bangladesh というタイトルで今年 12 月に発刊される佐賀大学農学部彙第 93 号 (Bulletin of the Faculty of Agriculture, Saga University, No. 93) に英文で掲載されることになっている。ただ今回の調査に際して、時間的な制約等があったために、香辛料の生産と消費に見られる季節性、地方性、固有性、伝統性、変異性などについて深く踏み込んだ現地調査が出来なかったことは、心残りであった。これは今後の課題としたい。また宗教などに歪められていない香辛料の消費地でその利用の歴史の変容と経時的変容をも視野に取り入れた現地調査を推し進めたい。

4 研究成果に対する活用と今後の展望。

今後、農学部彙報をベースにして、財団法人「山崎香辛料振興財団」による研究成果を国内外の学会誌 (生態人類学会等) で寄稿するばかりか、モノグラフを作成・上梓し、広く研究成果を広報したい。また国際学会 (国際民族学・人類学会、American Journal of Applied Sciences <Monthly Publication>等) に発表・投稿していきたい。さらに現在、研究代表者の武田のところでは研究している諸外国の留学生 (インドネシア、マレーシア、中国等) 諸君に武田の今回の調査研究を事例にさせて、それぞれの母国と故郷における香辛料の生産・消費に関わる種類・変異性や利用状況などについて調査研究をさせ、アジア全域における集大成に発展させたい。最後に日本以外のところで生産・消費されている種々の香辛料の種類やその利用・効能などについて日本で広く広報し、国内での、さらなる香辛料の利用につなげたい。

5 研究代表者として研究に関する自己アピール。

研究代表者の武田は、科研費等や国際学術研究の研究代表者や分担者として国内外 (アフリカ <タンザニア・ザイール・トーゴ>、オセアニア <フィジー・ソロモン諸島・ヤップ・パラオ・クック諸島>、韓国、中国、ラオス、インドネシア、スリランカ、バングラデシュ、インド、ブータン等) で長年、現地調査を行ってきた。香辛料に関わる個別的な研究報告等は数限りなくあるが、地域資源学的かつ文化誌的な視座を取り入れた国際的かつ学際的な現地調査研究は数少ないといえる。こうした研究の試みはまさに先駆的なものであると位置づけていい。また未開発・未利用の地域資源に関する記載は単発的な報告、単行本あるいはモノグラフなどに記載されることはあっても、現地調査による参与観察に基づくファーストハンドのデータや現地のラポールに根ざしたデータを優先した研究は数少ない。同時に学際的な視座から行った比較研究は、従来欠落していた領域といえる。